巻頭言

# 図書館の思い出

岐阜赤十字病院　病院長
加藤　俊彦

図書館の意義がＩＴの普及した現在、大変かわったのではないかと印象付けられているのは私だけではないと思います。自宅でもできる情報収集の簡便性や迅速性という点で、明らかにインターネットのほうが優っていることはだれもが認めるところです。

しかし、当然ながら専門分野の検索や、古い文献の活用など図書館の存在は私たちにとって無くてはならないものと思われます。また、図書館で多くの本との出合いによる感激や生涯にわたる思い出など人の一生に与える影響は図り知れません。

そんなわけで私にとっての図書館の思い出をこの機会に述べてみたいと思います。

私にとって図書室という存在を意識したのは中学生になった最初の年でした。中学校はそれまでの小学校が地元の幼馴染の集まる家庭のような存在から、少し範囲が広げられ他校の生徒が加わって、社会を意識するようになった印象があります。そんな中学校生活の最初の年に図書室の司書さんが転校されてきて音楽や国語の先生などと一緒に紹介されました。この時、初めて司書という職業があるのを知りました。若い男性司書さんは、生徒たちが昼休みにボールを打ってフライを捕るという単純な遊びに、皆に混じって一生懸命打球を追ったり、捕ったりされていたのが印象に残っています。そんなわけで、司書さんのいる図書室へよく出入りし、本を借りるようになりました。

その頃借りた本で思い出にあるのは「千夜一夜物語」でした、小学校のとき学芸会で「アラジンと魔法のランプ」が演じられ興味があったものと思います。たしか何巻もあったと思いますが、幼すぎた私には全く面白くも無く、途中で読むのをやめてしまいました。「ファーブル昆虫記」は細かい観察に感動したように思います。

大学生活では見知らぬ土地で初めての下宿生活でもあり、受験生活から開放されたこともあり、図書館は新鮮な感じを与えてくれました。大学の図書館は校舎とは別の瀟洒な平屋の建物で、涼しげな庭に面しており、落ち着いた場所で少し不安になりながら、そのうち大変安らぐ居心地の良い場所となりました。ここでは、装丁に惹かれたように記憶していますが、森鷗外全集を読みふけりました。

私の若い頃の最も感銘を受けた本を紹介します。人間の成長を温かくみつめる岡潔の「風蘭」と医師の成長過程を描いたクローニンの「城塞」です。「風蘭」は乳幼児がすでに感性豊かに鈴の音や美しい花などが分かり、興味を持っていることを認識させて世間に感動を与えた本です。「城塞」は医師が臨床の現場を通して成長していく過程を描いており、私に医師の姿勢の本質を示唆してくれた大切な本となりました。

当院も若い夢を持った司書さんに２年前から来ていただき、図書室が期待どおり充実してきました。全国の赤十字施設の図書館がネットで結ばれ、一大図書館として大いに利用されることを願っております。

---

KATO Toshihiko